病院図書館　2011;31(2):47-51

特集　総会・事例報告会（第124回研修会）

掲示物を使った図書室づくりとコミュニケーション
—公共・学校図書館での経験をもとにして—

柴田真由美

Ⅰ．はじめに

図書館は、公共図書館、大学図書館、学校図書館、専門図書館と、大きく四つの種類に分けられる。著者は、過去に市立図書館と県立高校図書室で勤務した経験を持ち、現在、病院図書館に勤務していることから、公共図書館、学校図書館、専門図書館の勤務経験があるといえる。館種は異なるが、そこで行われるのは同じ図書館サービスであり、利用者とのコミュニケーションである。このことをふまえ、公共図書館、学校図書館での経験をもとにし、掲示物を使って病院図書館で利用者とコミュニケーションをはかった取り組みを報告する。

Ⅱ．施設概要

豊橋市民病院（以下、当院）は、愛知県豊橋市にある診療科35科、病床数910床、職員数約1,100人の公立病院で、愛知県東三河地方の南部医療圏地域拠点病院であるとともに、高度先進医療機器を整備し、急性期を受け持つ基幹病院として、地域住民に対して効率的かつ質の高い医療を提供する使命を担っている。当院は診療棟、西病棟、東病棟、南病棟に分かれており、図書室は医局や看護局と同じ診療棟の3階にある。職員専用の図書室で、専任の司書一名で運営している。広さは120㎡で閲覧室と書庫を有し、閲覧席数12席、コピー機1台、パソコン6台があり、資料約4,300冊、購読雑誌は和雑誌125誌、洋雑誌145誌、製本雑誌約8,600冊を所蔵している（2011年5月現在）。利用者はICカードにより、一年中24時間入室できる。

Ⅲ．図書館サービスとコミュニケーション

図書館サービスにはさまざまなものがあり、貸出サービスやレファレンスサービスといった利用者と直接向き合って行うものや、資料や行事を介して利用者と向き合うものがある。資料の収集・保存・提供という使命を持つ図書館は、サービスを行うことで利用者に接する。良いサービスから利用者との良いコミュニケーションが生まれ、またサービスに反映される。

公共図書館でのサービスは、あらゆる年齢の不特定多数の利用者が対象となる。図書館員は「図書館の自由に関する宣言」や「図書館員の倫理綱領」をもとに図書館という組織の中の一員として、公平かつ公正に利用者と接することが求められる。学校図書館では、サービス対象は児童・生徒・教職員に限定される。教育現場であることを強く意識し、健全な教養育成を目的として利用者とコミュニケーションをとる必要がある。

Ⅳ．資料展示と掲示物

図書館サービスの中の一つ「資料展示会」は、図書館法第3条、学校図書館法第4条にそれぞれ記されている。季節や時事といったテーマに沿って図書館資料を集め、コーナーを設置する。その目的は、利用者の関心を得るようにし、貸出などの利用につなげることである。中心とな

しばた　まゆみ：豊橋市民病院　図書室
library@toyohashi-mh.jp

るのは図書・雑誌・視聴覚資料といった図書館資料だが、利用者の目を向けさせるため、展示場所は工夫を凝らした飾りつけをする。

最初に勤務した公共図書館は90万冊の蔵書を持つ市立図書館で、大規模な資料展示会も行われていたが、携わることはほとんどなかった。資料展示を強く意識したのは高校図書室勤務の時だった。高校図書室では5,000冊ほど所蔵していたが、蔵書も利用も「文学」が最も多く、他の分類の図書は書架でほこりをかぶったままになっていた。その本たちを明るい場所に集め、生徒に関心を持ってもらいたいと思い、色々な分類の資料展示を積極的に開催した。高校ではB規格の用紙が多くB4サイズのカラー用紙も多くあったが、あまり使い道がないので、展示の際に切り紙などにし展示コーナーを飾った。生徒には図書室が明るくなったと好評で、作り方を聞かれたり、作品を交換することもあった。次に勤務した蔵書40万冊の市立図書館では、一カ月ごとに資料展示を行っており、半年に一度くらいの割合で担当が回り、二人ペアとなって考えを出し合い展示にあたった。展示コーナーに足を止めてもらうため、折り紙やリボン、小物などを使って飾りつけをした。さまざまな図書館サービスの担当を持ちながら、「飾りつける」ということも仕事の一つであった。

V．図書室内掲示

1．きっかけ

当院図書室に勤務し一年が経った頃、知識・技術の向上につとめながらも、今までの経験を何か業務に生かせられないだろうかと考えた。また、医師や看護師の仕事はキレイなものばかりを見るものではないだろうと思い、少しでも気が晴れるようなものが見られる場ができないかとも考えた。図書室には窓がなく天井も低いので、窮屈な印象を受ける。しかし空間に対する不満は工夫次第で良くなることを高校図書室で経験していた。公共図書館・学校図書館時代に資料展示を行った際、折り紙やカラー用紙を使って飾りつけをしたことを思い出し、折ったり切ったりすることで植物を作り、図書室内で季節を表現しようと考えた。今いる利用者はもちろんのこと、新しく利用者を増やしたいという思いもあった。

2．場所と材料

作ったものを見てもらうには場所が必要である。しかし、カウンターや閲覧席の配置を考えると新しく場所を設置するのは難しく思えた。そこで目をつけたのは、図書室入口の壁、縦60 cm× 横54 cmほどの空間だった。カウンター越しに利用者と向かい合った時に壁をはさむ形になるため「場の共有」ができ、図書室を退室する時にも利用者の目に止まりやすい場所である（図1）。壁ならば利用者の動線の障害にはならない。

材料に関しては、公共図書館や学校図書館ではカラー用紙が何種類とあり、使用目的により色、厚さを選ぶことができた。しかし、財政難の当院では例えカラー用紙といえども請求しづらく、何かすでにあるもので代用できないかと考えた。図書室内を見渡すと、何となく取っておいた出版社や他病院からのカラフルな色の古封筒の山があった。これらはいずれはゴミになるものである。その前に使ってみようと考えた。

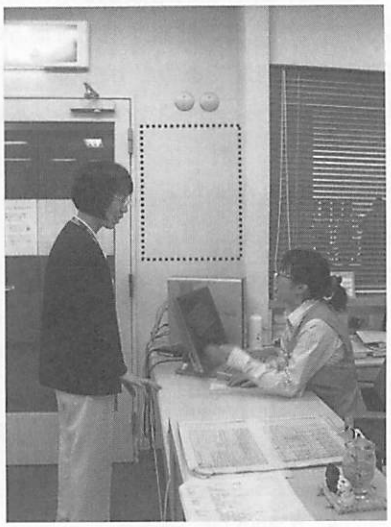

図1　掲示場所

材料になる古封筒の利点は、資源の再利用ができること、厚みがあるので立体感が出るということ。欠点は、折りにくい、色がそろわないなどである。

3. 掲示記録

場所と材料が決まったので以下のように掲示した。

まず、2010年6月の梅雨時期に紫陽花を作成した（図2）。薄紫色・青色・ピンク色といった封筒を選び、紫陽花のガクの部分は四つに折った紙を中心部分を切らないように楕円にくりぬき、20枚ほど重ねて作成した。葉は二つに折った紙を半円に切り、斜めに折り目をつけ紫陽花の背に貼り付けた。掲示を始めたところ事務職員の中から協力者が現れ、封筒で作成したカタツムリをプレゼントしてもらった。

7月には紫陽花の時に使用した封筒の余りで朝顔を作成した。折り紙の本を参考にし、花びらを五つに区切り円形にしたものに葉をつけ、ツルが棒をはって成長する様子を壁を広く使って表現した。事務職員の中にさらに協力者が現れ、自宅にあった包装紙を差し入れてくれたり、作成を手伝ってくれた。個数を増やすことができたので、医局や看護局、同じ階の少し離れた場所にある事務室にも飾った。

8月には大きなヒマワリを壁面に貼り付けた（図3）。黄色・薄黄色・橙色の封筒を事務室でとっておいてもらい、16枚の花びらと、折り返しを多くつけた中心部を貼り合わせた。

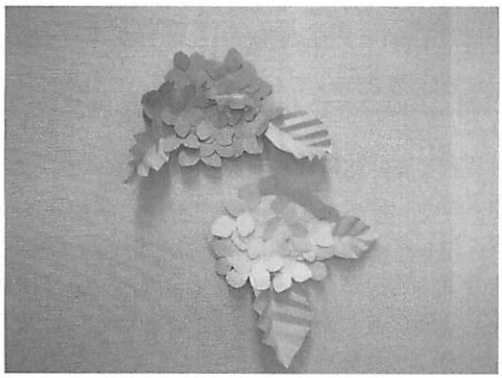

図2　2010年6月紫陽花

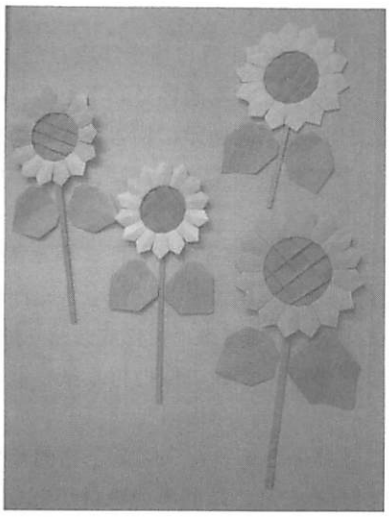

図3　2010年8月ヒマワリ

図4　2010年9月桔梗とススキ

9月に入り、月、桔梗、ススキを作成し、飾った（図4）。月のうさぎは高校図書室で作ったものを思い出し再現した。桔梗は薄紫色と青色の封筒と、ミスプリントらしく少しの印字のみで捨てられていた白の上質紙を使用した。ススキの穂は、紙を2mmほどに細く切り、片方の端をセロハンテープでまとめた後、もう片方を二重に丸めて曲線になるようにした。穂が不ぞろいで味が出たためか好評だったので、壁面にそのまま残し、10月から11月はススキ、薄

いピンク色のコスモスに変更した。

年が明け2011年1月に梅を作成した（図5）。事務室から拾ってきた濃いピンク色の封筒が役立った。枝は日本画を頭に描き、茶封筒を折り返しをつけて作成した。それに、鶯のぬいぐるみを添えた。

3月に入り、明るい雰囲気にしようと黄色の菜の花を飾った（図6）。紫陽花を小さく作成したものである。切り紙で蝶々を作成し貼り付けた。

4月は桜の手ぬぐいに桜の折り紙を散りばめた。

5月は花菖蒲を飾った（図7）。古封筒では色に限りがあるため、以前事務職員からもらった包装紙を使用し、濃い紫色と、薄い青色の花菖蒲を作成した。まっすぐな葉を多く貼り、群生している様子を表現した。

ヒマワリ、コスモス、桜は利用者からのリクエストだった。

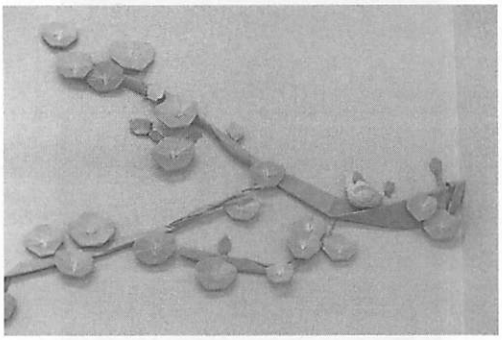

図5　2011年1月梅と鶯

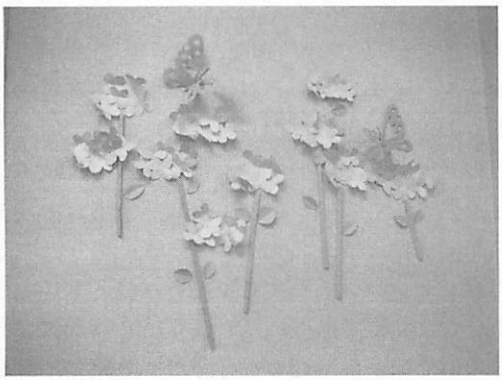

図6　2011年3月菜の花

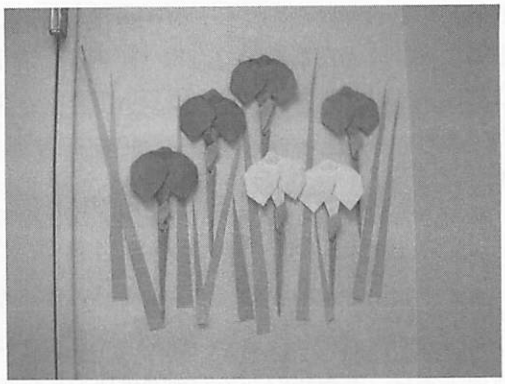

図7　2011年5月花菖蒲

4. 掲示の効果

このように図書室で古封筒の作品を飾ったところ、今まで挨拶、会釈のみだった利用者とも会話をするようになった。会話も最初は、作品に対する感想だったのが、しだいにいろいろな要望になっていった。「作品が欲しい」との希望があり、ICUや呼吸器内科病棟に紫陽花、朝顔、梅などを配布した。また、「病棟などに飾りたいので作り方を教えてほしい」との希望があったので、材料と作り方を書いた紙をキットにして希望者に配布した。特に紫陽花・コスモスの希望が多かった。作り方をマスターすれば身近にある不要になった紙でも作ることができる。さらには、「時間外に“作り方教室”を開いてほしい」とも言われた。まだ実現していないが、要望が多くあればやってみたいと思う。

とても印象的だったのは、ある師長との会話だった。入院中の男性がん患者さんに生きる目的を持ってもらうために、リハビリテーション技術室主催の工作展に参加させようとした師長から「作品を作ってもらえないか」と依頼をされた。もともと手先が器用な患者さんで工作も得意らしく、秋に掲示したススキを見た師長は、患者さんの作品を引き立たせるような風景になると感じたようだった。イメージに合うように、大きさ・色などを打ち合わせたのち、すぐに作成し師長に渡した。結局、作成したものは使われなかったのだが、参考にしてもらい、患者さん、ご家族、看護師たち皆で作品を作り上げたと聞

いた。工作展に出品する直前に、その患者さんは亡くなられたが、その後、病棟で看護師たちがフェルトなどで壁に飾りつけをして展示し、それを見た入院患者さんも喜んでいると聞き、何かしら現場の役に立つことができたのではないかと思った。

これらの会話は、図書館業務とは無関係に思われるが、図書室にいる「私」の存在を知ってもらい、会話し、利用者と近づき信頼を得られることで、図書館サービスにつながると感じた。

Ⅵ. 考察

これまで図書室で作品を掲示したことから、以下の3点に気付くことができた。

1. 図書室の存在の見直し

図書館の役割の一つとして利用者に「場」を提供することがある。公共図書館では住民同士、学校図書館では学年やクラスを超えた生徒同士が図書館内で交流するのをよく目にした。同時に利用者と図書館員が共有する空間でもある。また、著者が望む図書室とは、利用しやすい、会話しやすい、居心地が良いといった図書室で、公共図書館でも学校図書館でもそれを目指してきた。今回、掲示物を通して利用者と接し、会話することで図書室の存在について見直すことができた。

2. 資源の再利用

利用者と掲示した作品について会話する時、材料のことを伝えると皆驚き、より関心を持ってくれた。材料に古封筒を用いたことで、資源再利用のアピールになった。ふとゴミ箱をみると、必要ないと判断されたものだらけである。その中にも再利用できるものがあるということを、掲示を継続していくことで院内に伝えていきたい。

3. 自己満足との境界線

見るための掲示物は、ともすれば作成者の自己満足で終わってしまう。そうならないように、自分の中で境界線を作るため四つのルールを作った。

・なるべく勤務時間内に作成すること。
（試作は家で行い、職場では5～10分ほど空いた時間に作成する）
・材料を購入しないこと。
・利用者の視線を意識すること。
・図書館業務に支障をきたさないこと。

境界線が必要なのはサービスでも同じだと思う。自分の中でルールを作り、自分のための自己満足と、利用者のためのサービスのバランスを上手にとっていくことを考えるきっかけになった。

Ⅶ. 今後の課題

現在のところ、掲示物は図書室内にしかないため、目にする利用者は限られる。サービスもコミュニケーションも、図書室内で行われるので、まずは入室してもらうことが必要である。掲示物のことを聞きつけ来室してくれた利用者もいたが、今まで図書室を利用したことのない人たちが興味を持ち、入室するきっかけになるように、図書室の外に向けて発信し、図書室の利用促進につなげたい。

Ⅷ. おわりに

公共図書館では「幅広く公平に」、学校図書館では「教育の現場を意識して」利用者とのコミュニケーションを試みてきた。病院図書館では、その専門性、高度な知識・技術の必要性において、着任当初は不安な気持ちを抱えながら利用者と接していた。しかし、利用者との会話が増えたことにより、「利用者を知る」「利用者が必要としているものを知る」「利用者を取り巻くものを知る」ということに繋がった。サービスもコミュニケーションも、利用者と図書館員のお互いが完全に満足するようなものはないと思う。それゆえ、一歩一歩前進することを心がけ、より良い図書館サービスを行うために、これからも利用者とのコミュニケーションを大切にし、図書室内で笑顔になってもらえるよう努力していきたい。